

ここには久しぶりに刺激的な近世政治思想史の構想がある。著者は、大名（領主階級）や知識人、さらに村役人らの被支配層も含めて、近世社会に広く社会通念として存在していた「関係意識」としての政治思想の基底に、『太平記』講釈のネタ本であった『太平記評判秘伝理尽鈔』の存在があったと主張する。つまり、近世政治思想の特色とされてきた世俗権力による宗教の統御論、国家＝＜公＞観、撫民＝仁政思想、農政思想の基底には、従来考えられてきたような儒学（朱子学、古学）ではなく、『理尽鈔』における主張、例えば世俗権力に統御されたイデオロギー装置としての神仏論、家臣・領民の心を掌握し時宜にかなった仁政を行う名君としての楠正成像などが存在しているというのだ。しかも、それは「太平記読み」という大名近侍の「御咄の衆」らによって、前田利常・光高、池田光政らの大名に直接に影響を与えたのみならず、出版メディアの発展を媒介としながら、対抗的言説も含めて山鹿素行・熊沢蕃山・佐藤直方らの儒者の主張や、やがては十八世紀の「忘れられた思想家」安藤昌益の思想にも影響を与え、また出版文化のみならず『仮名手本忠臣蔵』などの歌舞伎も通じて、河内屋可正らの村役人層や百姓一揆の指導者層にも、実践的な政治思想として広汎に受容されていったというのだ。かくして、近世前中期を通じて、支配層・被支配層、知識人・非知識人を貫いて楠正成像やそれに託された名君像、「民は国之本」論などが共有されることとなり、それらを土壌として近世の政治思想＝「関係意識」が構成されていたという驚くべき事実が明らかにされる。

方法的にみても本書は次の三点において斬新である。一つは、大名・領主自身の政治思想が、知識人や被支配層との関連で初めて本格的に分析の俎上に乗せられたこと。第二は、政治思想を儒者などのテキストから直接抽出するのではなく、「関係意識」＝社会意識として捉える方法が明確に打ち出された点。第三は、思想史と政治史・経済史・文化史を縦断する方法が採られていることである。逆にいえば、本書の登場によって、従来の儒者のテキストから政治思想を抽出し、かつ民衆思想や文化史と交錯することのなかった近世政治思想史を打破する道が開かれたということだ。この意味では、本書には、近世思想史研究のみならず、近世史研究全体を揺さぶる力が存在している。

確かにわれわれにも思い当たる節はあった。例えば、儒学・朱子学を近世の体制的イデオロギーと捉えていいのかという問題が提起されて久しいし、楠正成が何故あれほど近世の知識人や巷間で語られているのか、あるいは安藤昌益の思想は本当に孤立して突然生まれたものなのか、百姓一揆での為政者への仁政要求、「民は国之本」論はどのようにして百姓の意識に宿ったのか、などという「謎」は近世思想史・近世史を研究してきた者にとっては、何となく気にかかる問題だった筈である。本書はこれらの疑問に一挙に答える内容を有している。しかも本書は、著者の粘り強い実証によって丹念に編まれていて、きわめて説得的である。『太平記』や『理尽鈔』の丹念な読み込みは無論のこと、『理尽鈔』の金沢・岡山・江戸などでの伝授・受講関係の精査、『山鹿語類』『光政公御筆御軍書』『陽広公偉訓』『河内屋可正旧記』などに『理尽鈔』がどのように影響を与えているのかという丁寧な比較検討、岡山藩に『理尽鈔』をもたらした横井養元なる人物の探索など、その手堅い実証は本書を学問的にも重厚な作品に仕立てあげている。また、中世の『太平記』が『理尽鈔』に読みかえられていく過程の分析、安藤昌益によって『理尽鈔』の「関係意識」が踏まえられつつその欺瞞が暴露されていく過程の分析には、在来の社会通念がどのように乗り越えられていくのかという隣接期への見通しも示されていて、中世史や近世後期の歴史を研究する者にとっても、さまざまに刺激される内容を含んでいる。

無論、本書に対する細かい注文も幾つかある。だが、それらの多くは本書の最後に記されているように、著者自身によっても十分自覚されている課題である。ただ二つだけ気になる点を記しておくならば、本書がさまざまな「分科史」の「総合史」としての思想史の作品として提示されていることが、逆に従来の儒学思想史・民衆思想史研究や政治史研究の見解を反復的に再確認してしまう観を与えていること。もう一つは、「太平記読み」体制という刺激的提起も、直後に近世の「関係意識」の全てを「太平記読み」で説明しえるのかという疑問を生むものであること。もっとも以上のことは、在来の歴史学の知的枠組み自体を批判する＜鬼子＞としての思想史や、「太平記読み」からも疎外（？）された民衆思想史に関心のあるわたくしの感想であって、本書の価値を些かも減じるものではない。

61.